

随 想

歴史的建造物の野外劇場への転用

玉木 正男

ウィーン国立大学病院の歴史的建造物が劇場などに変身する。

「健康文化」第5号に書いたことであるが、オーストリア・ウィーンの国立大学病院 Allgemeines Krankenhaus は、18世紀以来臨床医学に指導的役割を果たしたメディカル・センターであり、日本最初の放射線科医藤浪剛一が留学したとき毎日通ったという古い二階建ての建物は、戦災を受けることなくずっと使われて来た。しかし近年、隣接して近代的大病院が増築されたので、今年4月から古い建物は美術ギャラリーなどに（外科手術室はナイトクラブに）転用され、中庭にはカフェ、レストランを設けるだけでなく、映画、劇などをみせることになったという。米国の週刊誌TIME 94年8月15日の記事である。胃切除手術を創始した Billroth 教授の立像は、どこかへ引っ越すのであろうか。いや、ブラームスの親友だったという彼は、中庭に残って音楽をたのしみたいかも知れない。

ロの字形の二三階建て石造建築は、東欧の古都で市役所などにもよく見かけるが、所々に入口があって中庭に通じている。中庭に舞台を仮設し、部屋から持ち出した椅子を並べての市民コンサート、まわりの石造建物の反響もあって、すばらしい。

ローマの遺跡、カラカラ浴場での野外オペラはもはや見られない。

Caracalla 皇帝が建設した浴場の遺跡は、1938年以來の野外オペラ演奏と多数の人々の参集のためいたみがひどく、今期以降“*No more*”の決定がなされると今年6月20日のTIMEが報道したが、8月16日の朝日新聞東京版で第一面トップの大きい記事になったのには少々驚いた。筆者は5年前の夏、国際放射線医学会議に参加後ここで野外オペラ「トスカ」をたのしんだ。星空の下、歌姫トスカは「歌に生き愛に生き」のアリアを高らかに歌ったあと、あわれテベレ河に身を投げる。

暑さのきびしい夏の一晩、考えのおもむくままに筆をはしらせた小文である。
(1994年8月記)

(大阪市立大学名誉教授)